

■第 12 回精神障害者自立支援活動賞（リリー賞）受賞者 【当事者部門】

統合失調症の体験を語り、精神障害者の就労支援や自費出版を通じてピアサポートの普及に貢献

大江 祥博(おおえ よしひろ)さん 44 歳【広島県広島市】

仕事のストレスなどからうつ症状となり、やがて統合失調症を発症。入院生活を経て、現在は広島市内の就労支援センターFLaT の正規職員として同じ精神障害者の支援(ピアサポート)に携わりながら、研修会や家族会での講演を重ねている。ピアに関するハンドブックを自費出版するなど、自らの体験を社会に対して積極的に発信し、ピアサポートの普及に貢献している点が高く評価された。

●現在の活動

大江さんの現在の仕事は、精神障害者の生活サポートや求職活動の応援だ。週 5 日、個別面談や求人に向けての応募書類作成のサポートなどを行っている。「ご本人の意思を尊重することが、支援者としては必要だと思う」と話す大江さん自身も、退院後に就労支援を受けた経験を持つ。しかし復職後、仕事で成果を上げ会社から期待されるにつれて、プレッシャーの高まりから症状が悪化したこともあった。その経験から大江さんは、「リカバリー」と「ストレングス」の概念が精神障害者に必要であると考え、ハンドブックの執筆や講演を通じて、家族や支援者にも伝えようとしている。「自分の“軸”を見つけてもらうための支援をしていきたい。“軸”が見つければ自信につながり、多少の困難にも対処できるようになってくるので」と大江さんはいう。



ピアサポーターという代わりに「大江ん隊隊長」を名乗る大江さん。「私にとっての“ストレングス”を基にした“リカバリー”とは、自分自身の長所に着目しながら、人生を取り戻していくプロセスです」

●統合失調症の発症とデイケアでの出会い

大江さんが統合失調症を発症したのは 10 年前、34 歳のとき。自ら志望してシステムエンジニアとなり東京で働いていたが 4 か月間入院した。「幻聴と被害妄想の症状がしんどかったです」。退院後、病院のデイケアで出会い、就労を支援してくれたのが現在勤める FLaT の代表・澤田恭一さんだ。「具体的な支援よりも、自分が思ったことを受け入れてもらったことが有り難かった」と大江さん。2013 年 4 月に澤田さんが独立して FLaT を開所した際には、立ち上げメンバーに誘われた。以来「自分にしかできないことを」と意識して仕事にあたっている。



勤務する FLaT の代表・澤田さん、同僚の湯原さんと。大江さんにとって澤田さんは「目指すべき存在」

●活動により変わってきた自分

初めて人前で自分の体験を話したのは 5 年前。「自分の場合は語ったほうが楽になる」と、全国各地に出向いて講演する大江さんだが、かつては人との交流も少なかった。人前で話したこと、FLaT で働き始めたことで、自然と変わってきたようだ。

●今後やりたいこと

小・中・高校生にも「精神障害者の現状や必要な支援について考えよう」と話していきたいという。「ストレングスやリカバリーの考え方は、子どもたちが“ひとりの人間として”生きていくうえで必要なことだと伝えていきたいです」。



自費出版したハンドブックは 3 冊。制作の方法は facebook を通じてピアの人が教えてくれたという